広島大学　大学教育研究センター
大学論集　第10集（1981）：1－16

女性高等教育の段階的移行

―― 平安朝，10世紀・11世紀の事例について ――

稲　賀　敬　二

目　次

1. はじめに ――「大学の栄ゆる頃」
2. 当時の大学と大学の教授たち
3. 当時の大学と教育と試験
4. 大学出の男をからかう女性
5. 女性高等教育の一般的目標
6. 教養課題拡大の契機
7. educator の役割
8. 学習成果としての著作
9. 自由裁量と創造性重視の指導体制
10. おわりに ――一つの壁

女性高等教育の段階的移行

—— 平安朝，10世紀・11世紀の事例について ——

稲　賀　敬　二*

1　はじめに　—「大学の栄ゆる頃」—

「昔おぼえて大学の栄ゆる頃なれば，上・中・下の人，我も我もとこの道に志し集れば，いよいよ世の中に才ありはかばかしき人多くなむありける」— 源氏物語の少女巻の一節である。

ここにいう「大学の栄ゆる頃」とは，いつの時代を指すのか。源氏物語は11世紀初頭，一条天皇の時代に書かれた。しかし，源氏物語は，その中にまず登場する桐壺帝は醍醐天皇を念頭に置いたと思われる書きぶりであること，既に定説である。従って，「昔おぼえて」大学が栄えている時代というのは，一条天皇の時代から醍醐天皇の時代を思って述べているのか，作中の醍醐天皇の時代を起点として更に時代をさかのぼる「昔」とを対比しているのか，物語の虚構の世界の事とて，容易に断言しがたい。しかし，ここに描かれているのが，古き，よき時代の，大学の黄金時代の実態の，ある一面を示すものと受けとめてよいであろう。紫式部は，事実をゆがめて書いたりはしない女性だという定評があるから。

「大学の栄ゆる頃」を舞台にしているとはいうものの，源氏物語の中に，「大学」問題が大きく扱われているのは少女巻だけである。それは，息子の夕霧をどう教育するかという光源氏の教育法とかかわる物語である。光源氏はこの時，内大臣，昨年は太政大臣昇進の内定があったが，これを固辞した。大臣の子であれば，元服してすぐ四位か五位になるのが当時の慣行である。元服した夕霧についても，元服して四位になるのが当然だと，源氏自身も思い，世間もそう信じて疑わなかった。だが光源氏という人は，時あって平凡な事を敢えて避ける。「なかなか目なれたる事なり」と，世の常識にさからって夕霧を六位とした。六位というのは，並々の上達部の子弟にも劣る地位である。

光源氏のこの処置は，夕霧を大学で勉強させたいという意図から出た。「みづからは九重の内に生ひ出で」て，「世の中の有様も知」らず，日夜，父帝の御そばにばかり居たために本当の学問をしなかった……と光源氏は回想する。学歴万能の世の中だから夕霧を大学へやるというのではない。本当の学問を身につけさせたいというのである。

「高き家の子として，つかさ・かうぶり心に叶ひ，世のなか盛りにおごりならひぬれば，学問などに身を苦しめむことは，いと遠くなむおぼゆべかめる」— 当時の貴族の普通の考えを光源氏は危惧する。親の威光で順調に昇進する貴族の子弟に対する時，世間の人は表面では追従し御機嫌をとるが，腹の中ではばかにしているものだ。そして，頼りとする父兄に先立たれ，勢力衰退のきざしがあらわれて来ると，実力のない二代目は軽蔑されるようになってしまうのがおちだ。だから学問を身につけ

* 大学教育研究センター長／広島大学文学部教授

て，当人の力で勝負ができるような人物に仕立てておかねばならぬ ――これが光源氏の教育観である。実利主義だが，学問の本質をよく見ている。

だから，大学へ入学する事が一流会社への就職を保証するという近代の図式とは大分違う。大学へ入るという事は，「さし当りては，心もとなきやう」な一見もどかしい迂遠な道なのである。だが，より道をする事で「遂に世の重しとなるべき心掟てを習」うことができる。光源氏が夕霧に期待する教育効果は，将来一流政治家として国家の重鎮になりうる修養を身につけさせる事である。

33歳で太政大臣に昇る異例の昇進をした光源氏は，今12歳の夕霧があと20年くらいで自分と同じ太政大臣に昇りうるとは思っていない。しかも20年たてば自分は50歳の坂を越す。当時の常識では50歳は長命の部類であって，そこまでは生きられなくても，夕霧の将来について安心できるようにするために，夕霧には大学への道を選ばせる。だから夕霧の大学入学は，今日のように，まわりの者から一流大学へ入学した若者が羨望の眼で見られるという状況とは，全く違うのだ。当時の大学は，いわば官吏養成の機関であって，官吏への道は一流貴族への道とは別なものである。

夕霧は，平素「我より下﨟と思ひおとし」ていた従兄弟たちすら「皆おのおの加階しのぼりつつ」一人前の貴族の道を歩んで行くのに，何故，自分ひとりが六位ふぜいの地位に取り残されなくてはならぬのかと，辛く思っていた。「大学の栄ゆる頃」に，大学へ入学する事を不満に思う夕霧と，それを承知で夕霧を大学へ入学させる光源氏とは，ともに今日の大学教育の常識的理解とは次元を異にする時代を生きていたわけである。

2　当時の大学と大学の教授たち

大学寮は，当時の日本唯一の，首都にある国立大学であった。地方大学として国学があるが，その格差は今の旧帝大と新制大学との格差とはくらべものにならぬ程に懸絶していた。

大学寮は朱雀門の外，神泉苑の西隣にあった。神泉苑は南北四町，東西二町を占め，中国の天子の遊宴の場を摸したものであり，その隣に四町を占めた大学寮がある。これも中国風の設計プランであった。大学寮の管理運営の長官である頭（とう）は，従五位上相当官で，学生の試験と，2月・8月の孔子をまつる釈奠（せきてん）にかかわる。この下に助一人，正六位上相当以下の事務組織がある。教授陣は博士以下のスタッフ，学生は定員400人というのが養老令の定めであった。

曽つて紀伝道と呼ばれたものは，平安時代になって文章道になっており，この道に入る者は，まず中国風に字（あざな）をつける。夕霧もこの字をつける式を，光源氏の邸宅二条院の東院で行った。

最高級の貴族の息子が大学へ入るために字をつける式を行うのである。上達部・殿上人は，滅多にないこの機会を見逃すまいと「我も我もとつどひ参り」，こういう式には慣れているはずの「博士どもも，なかなか臆しぬべし」という有様であった。

光源氏は博士たちの場違いの動揺を察して，“遠慮せず，きまりの通り厳格に行え”と指令する。かくて，儀式を行う博士たちは，「家よりほかに求めたる装束どもの（スナワチ，本日ノ盛儀ノタメノ貸リ着ノ衣裳デアル），うちあはずかたくなしき姿などをも（貸リ着ガ体ニ合ワズ長過ギタリ短カ過ギタリノ有様）恥ぢなく，面もち，声づかひ，むべむべしくもてなしつつ（荘重ナ儀式風ノ顔ツキ，

発声デ）座につき並びたる作法よりはじめ，見も知らぬ様ども」であった。若い君達は，つい笑い出してしまうほどの一座の有様。大学人の慣行の儀式は，それ程までに世間離れしたもので，荘重にやろうとすればする程，珍妙なものとなった。大衆化され，タレント教授が聴衆を笑わせながら座をつとめる現代とは違う大学の，閉された内部が，貴族たちの前に示されるのだから無理もない。

儀式の最中，酒餞の扱いをする者が途中で笑い出したりしては困ると，特に人選には意を用いたが，右大将，民部卿などという高官連中は，酒器を格式通りに扱う事にはなれていない。ちょっとしたミスがあると，博士たちの叱声がとぶ。

「おほし垣もとあるじ，はなはだひざうにはべりたうぶ，かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや，おほやけには仕うまつりたうぶ，はなはだをこなり」（オヨソコノ饗宴ニ相伴役トシテ出席ノ方々ハ，甚ダタイシタモノデアラレル，コレ程著名ナ私ヲ御存知ナクテ朝廷ニ仕エテイラッシャルノカ，ドウモオソレイツタ事ダ）

実はこの博士のことば，学者の世界でだけ通ずるもので，貴族の日常会話とは全く違う。「甚だ非常に侍りたうぶ」というのは，儒者たちが公卿の相伴を有難いと感謝しているのか，それとも逆に，相手に向って招かれたのを光栄に思えといっているのか，はたまた相手の作法に誤りがあるのをとがめているのか，今日の学者にもよく解し難いことばである。だから，全文の真意も実はよくわからない，ことによったら，座に居あわせた貴族たちも，聞き知らぬ異国のことばを聞いている様なもので，チンプンカンプンだったのかもしれない。そこで皆が，こらえ切れずに笑うと，また叱声がとぶ。

「鳴り高し，鳴りやまむ。甚だ非常なり。座をひきて立ちたうびなむ」（ヤカマシイ，静マレ。常識ハズレモ甚ダシイ。退席シテイタダコウ）

大体ここに「甚だ」ということばが三例出てくるけれども，源氏物語に見える「甚だ」ということばは，ここに出てくるだけである。この一事だけからもわかるように，ここで学者たちの喋ることばは，学者たちの社会でのことばであって，貴族社会の日常語とは遙かにへだたるものだったとわかるわけである。

3　当時の大学と教育と試験

字をつける儀式が終ると，今度は入学式である。学令の規則によると，その師に「束脩之礼」を行うことになっている。中国では十束の干し肉を持参するというが，日本では布一端（一反）に酒食を添えて献ずる。これで師弟の関係が成り立つ。今日の入学納付金である。

夕霧は大学寮の曹司には寄宿しないで，二条院の東の院の内に曹司を作り，ここで勉学することになる。また通例は大学寮の博士について学ぶところであるが，夕霧は「まめやかに，才深き師」についたとあり，この師は大内記であったとある。中務省の役人で，詔勅宣命を作り，位記を書くのが大内記の仕事である。太政官の外記に対して内記といい，儒者の名文家が任ぜられるのが常であった。この大内記は「世のひが者にて，才の程よりは用ゐられず，すげなく身貧し」い人物であったが，光源氏は敢えてその人柄を見て「かく取り分き召し寄せ」たのだという。夕霧との師弟関係は私的なもので，大学における正規のスクーリングは必ずしも要求されないものだったようである。

夕霧の学問のカリキュラムは，次に受ける寮試の試験に備えて史記をマスターする事であった。これは寮試受験者の必読書である。夕霧は史記130巻を4・5か月の間に読み果てて寮試に臨む。慎重な源氏は事前に予備テストまで行って，本番に備えた。合格して擬文章生（文人擬生）となる。明経・明法・算・書などの道は専門職業人養成課程であるが，夕霧の専攻した文章道は，大学の中で最も重んじられ，貴族むきのものであった。

少女巻の巻末，朱雀院に行幸があった。専門詩人は召さず，「才かしこしと聞えたる学生十人を召」して，勅題を賜り，作文の試が行われた。夕霧に試験のチャンスを与えるための企画である。学生たちは，ひとりひとり「つながぬ舟に乗りて池に離れ出でて」詩を作る。不正行為防止のために考え出された方式で，放島の試ともいう。文章生（進士）の資格認定試験であって，本来は式部省が行う試であるが，その省試の形を御前で行うわけである。

「かくて大学の君，その日の文うつくしう作り給ひて進士になり給ひぬ」。当日及第したのはわずか3人であった。昨年夏，元服し，大学に入り，今年の春，進士となり，夕霧は秋の司召しに従五位となり，侍従に任官する。

夕霧にとっての大学は，そこを通過する事によってのみ輝かしい未来が約束されるというようなものではなく，たった1年ほどの経験ではあったが，じっと一つの事に耐える修練の場であった。耐える事を身につけた夕霧は，当分「まめ人」と呼ばれる素直なマジメ人間として物語の世界を生きて行くことになる。彼が読んだ史記130巻が，彼の人生に，また政治家としての彼に，どんな影響を与えたかというようなことは，源氏物語には書かれない。

夕霧のような特殊なケースの外に，菅原氏，大江氏，清原氏などという学問の家の人々がどのように活動したか，また，一般に学者たち，学問を身につけた者たちの社会的な活動はどのようなものであったか，等々，問題は多いが，本稿の主題はそこにはない。源氏物語の夕霧の場合を通して，男性の社会には大学という高等教育機関があり，大学が貴族たちから無条件に尊敬される存在というわけではなかったけれども，それなりに社会的な機能を果していたという事を紹介すれば，事足りる。本稿では，そういう男性社会における高等教育の機能に対して，女性たちの高等教育は，どういう形で，どういう場で行われていたかを考えたいのである。

4　大学出の男をからかう女性

大学時代の夕霧の生活を書き残してくれた紫式部より少し先輩に当るのが，清少納言である。枕草子の中には，藤原公任など当時の男性知識人のトップクラスと対等につき合っている彼女の姿が，数々描かれている。男性知識人からほめられると，清女もうれしがる。だが，それは相手が一流の男性だからの事であって，彼女が二流クラスの男性を相手にする時は，どんな具合になるだろうか。枕草子の中に，次のような話がある。

長保元年（999）といえば，清女が仕えていた中宮定子が薨ずる1年前の年である。この8月9日，定子は中宮職の御曹司から前但馬守平生昌（なりまさ）の邸へ移御された。出産準備のためである。同年11月7日，中宮はここで敦康親王をご出産になった。中宮の里邸であった二条北宮は長徳2年

（996）6月9日，焼亡しており，中宮の父道隆，母高内侍，外祖父成忠等も既に世を去っていたし，兄弟である伊周・隆家たちは失脚左遷の一時期を経て，今は都に帰って来てはいるものの，そこへ出産のために移るというのは，いろいろ支障もあったのであろう。

事実，中宮が生昌の邸へ移る同じ日，道長は人々を引き連れて宇治の別邸へ出かけ，このため中宮の行啓には人手が足りなくなってしまうという有様であった。小野宮実資は小右記の同日の条に「行啓ノ事ヲ妨グルニ似タリ，上達部憚ル所有リ参内セザル歟」と道長のやり方を批判している。中宮とそのまわりの人々は，こういう道長のやり方を横目で見ながら不遇をかこたねばならぬ時代の事である。

生昌邸へ移る中宮に従って，清女たち女房も車で行く。まだ設備は完全に整えられていまいから，車を軒近くまで引き入れて，すぐ家の中へ入れるものと，たかをくくって出発した清女たちは，門が小さいために車が入れず，車から建物まで，仮設の敷きものの上を歩かねばならなかった。殿上人や地下の者たちが立ちならんで，一行をじろじろ眺める。腹立たしい気持ちをぶっつける相手は，当邸のあるじ平生昌ということになる。

生昌が来ると，清女は，まずこう問いかける。

「いで，いとわろくこそおはしけれ。などその門はた狭くは作りて住み給ひける」

門が狭いから私たちは車からおりて歩かなくてはならなかったし，おかげで男たちから，じろじろ見られてしまったじゃないのというわけである。生昌は涼しい顔で，

「家の程，身の程に合はせて侍るなり」

と答える。家の規模は身分相応にするのがよいという判断である。清女はすかさず，

「されど，門のかぎりを高う作る人もありけるは」

と切りこむ。門だけは宏壮に作ったという中国の故事をにおわす発言である。これを聞いて生昌は「あな，おそろし」と，大げさにびっくりしてみせて，

「それは于定国（うていこく）が事にこそ侍るなれ，古き進士などに侍らずは，承り知るべきにも侍らざりけり。たまたま此の道にまかり入りにければ，かうだにわきまへ知られ侍る」

と答える。「于定国が事」というのは，漢書（巻7・列伝41）にある話。「始メ定国ノ父于公，其ノ門閭壊（こぼ）テリ，父老方（まさ）ニ共ニ之ヲ治ム。于公謂ヒテ曰ハク，『少シク門閭ヲ高大ニシテ駟馬高蓋ノ車ヲ容レシメヨ（中略），子孫必ズ興ル者有ラム』ト。定国ニ至ツテ丞相ト為リ，永ク御史大夫ト為リ，封候世ニ伝フト云フ」わけである。于公高門の故事は著名であるが，清女はまず，「門のかぎりを高う作る人」といういい方で，生昌がすぐ于公高門の故事を思い出すかどうかをためす。第一課題である。その上で，故事を知っているなら，当然この表現から，「家の程，身の程に合はせて」作る生昌は，単に門を狭く作ったというにとどまらず，公務にはげみ，陰徳をほどこすという，于公のような徳に欠けている事を自から認めざるをえなくなるわけである。――清女はこう判断して発言したわけだ。

生昌は，まんまと清女の第一課題でひっかかった。門を高く作ったのは，漢書にあるように，定国の父の于公であって，定国ではない。生昌が「それは于定国が事」といったのは，于公と于定国を混同しているからであろう。一歩退いて好意的に見ても，生昌の答えは正確だとは評しかねる。

清女はだから，すかさず，ことばをついで，

「その御道も，かしこからざめり。筵道敷きたれど，皆おち入り騒ぎつるは」

という。進士として学問にはげんだから，あなたのいう事もわかると答えた生昌のことば尻をとらえて，「此の道」などと偉そうな事をおっしやるけれど，その道も大した事じやなさそうねと，生昌の「学問の道」の方をちくりとやっておいて，それを生昌邸の北門からの「道」の悪さにひっかけて攻撃するわけだ。

生昌は清女の畳みかける攻撃を「雨の降り侍りつれば，さも侍りつらむ。よしよし，また仰せられかくる事もぞ侍る。まかり立ちなむ」と，やんわり受けて退散する。

生昌は文章生の出身，その兄惟仲も文章生を経て，大学頭を兼ねたりした人物である。

清女と生昌との応対はこの段でまだ続くのだが，今は清女論ではないから省略しよう。なぜ清女はこんなに生昌に当り散らすのか，また生昌は清女に敵しえぬ駄目な男だったのかどうかなど，本当はここで生昌弁護論を一こと加えたい所だが，別に述べたことがあるので（拙著「鑑賞日本の古典5」の枕草子，昭和55年，尚学図書），それに譲る。

一体，こういう男性知識人に対抗できる女性は，どういう形で，その高等一般教育相当の教養を身につけ，また発揮できるようになったのだろうか。

5　女性高等教育の一般的目標

平安時代の身分高い女性の必須教養は何であったかを示す著名な話に，こんなのがある。

村上天皇の御代（清少納言が仕えた定子は一条天皇の皇后であるが，村上天皇は一条天皇の祖父に当る），左大臣藤原師尹の娘で，村上天皇の女御となった芳子，宣耀殿の女御と呼ばれる女性がいる。彼女がまだ結婚前の姫君の時代，父から課せられた学習課題は，

「一には御手を習ひ給へ。次には琴（きん）の御琴を，人よりことに弾きまさらむと思せ。さては古今の歌二十巻を皆うかべさせ給ふを御学問にはせさせ給へ」

ということであった。書道と音楽と，古今集の歌の暗記（これは同時に和歌の教養ということになる）という三つである。当時の高貴な女性は，直接人前に出る事はまずなかったから，男たちは，隔て越しに聞えて来る楽の音から，その弾き手のすばらしい容姿を想像するくらいしか，その女性を知る手がかりはない。もらった手紙のすぐれた筆跡を通して，その女性の人格を思うわけである。几帳越しにことばを交す時でも，女性は寡黙であってかまわない。時折，古歌の一句などをうまく返事がわりにつぶやけば，その方が奥ゆかしいというわけである。師尹が娘の教養の主要目標をこの三点にしぼったのは，なかなかよい着眼と申さねばならぬ。

芳子は父の命令を忠実に守って，古今集20巻を完全にマスターした。入内後，村上天皇はこの噂の真偽を確かめるために，テストをやる事を思いつかれた。天皇は古今集のテキストを開げて，「その月，何の折，その人のよみたる歌はいかに」と質問される。間には几帳があるから，女御の方からテキストは見えない。

女御はテストされているのだなと気づいて，天皇の面白い趣向に感心する一方，“もし忘れたり，

まちがえたらどうしよう”と，胸をどきどきさせながら，それでも誤りなく答えて行く。「さかしう，やがて末まではあらねども，すべて，つゆたがふ事なかりけり」というのだから，一首全部を声高々と朗詠するわけではない。「さかしう」利口ぶって，そんな答え方をしたのでは却ってぶちこわしになってしまう。帝が「雲林院の木の蔭にたたづみて読みける　僧正遍昭の歌は」とお聞きになると，女御は「わび人のわきて立ち寄る木の本は（頼む蔭なくもみぢ散りけり）」というように，古今集巻五，秋下の，歌の上の句あたりまでを答えるというやり方である。

10巻までやって，一つも間違いがない完全な答え方なので，もうこれで終りと，一度お休みになった帝は，“いやいや明日に延ばすと今夜準備の余裕を与える事になる”と，また起き出して，夜更けまでテスト続行。女御の家の方では父の師尹が娘のテスト結果を案じて神仏に願をかけるというおまけの話までついている。

この話は，清少納言が宮仕えに出てまだ間もない，正暦5年（994）2月のころ，定子が，古今集の歌の上の句を読みあげて，女房たちにその下の句を答えさせるというテストを行った時，全員成績がかんばしくなかった後を受けて語られた，昔の実例である。

宮中に仕える女性たちは，こういう具合に，いつ不意打ちのテストを課されるかわからないのである。出題者は，あらかじめテストに出題する範囲を示したりはしない。また特別に学習時間を設定する事もない。宮仕えの場は，何げない日常会話一つに及ぶまで，何時それがテストの問題になるかわからないのである。テストを受ける側は，数次のテストに合格さえすれば，一定の資格が与えられて，以後はテストの責め苦から解放されるという保障なしに，絶えず緊張を持続し，いつ出題されるかわからぬ問題に向って万般の教養を積み続け，これに備えねばならぬのである。生涯教育の原形みたいなものが，ここにはある。

女性たちにとって，宮仕えという生活の場が，そのまま高等教育のための機能となっていたわけである。

ただ，ここにあげた実例からは，先に述べた清少納言の于公高門の故事のような漢籍の知識は，少くとも師尹などの女性高等教育の目標事項には入っていない。このあたりの問題を次に考えてみたい。

6　教養課題拡大の契機

同じ枕草子に，もう一つ村上天皇の時代の話が見える。雪のひどく降った日，天皇はこれを器に盛って，梅の花を挿して，お側に居た兵衛の蔵人という女性に向かって，「これに歌よめ。いかが言ふべき」とお尋ねになった。雪は既にやんで，月が冷たい空に輝く夜であった。彼女は，天皇のご下命に対して，「雪・月・花の時」とお答えした。

これは，白氏文集の「殷協律ニ寄ス」という詩に「琴詩酒ノ伴（とも）ハ皆我ヲ抛（なげう）ツ，雪月花ノ時最モ君ヲ懐（おも）フ」とある一句を引いたものである。“琴詩酒の友は皆私を見捨てて散り散りになってしまったが，雪月花の折々，思い出すのは君の事だ”というこの白楽天の詩は，和漢朗詠集（交友）にも見えて，当時多くの人の知る所であったと思われる。

月明の夜，器の雪に梅の花がさしてある。ここに雪・月・花の道具立てがそろっている。そこから，

とっさに，これは白楽天の詩の趣と同じだと判断できるというのは，才女の条件の一つである。

次に，彼女は，「雪月花の時」と答えて下句の「最モ君ヲ懐フ」は口にしない。これを言外にこめて，彼女が帝を思う気持ちは直接ことばに出さない。これは女性らしいひかえ目な態度をどんな時も忘れない配慮である。これも才女の条件の一つである。

第三に，「これに歌よめ」と命ぜられた時でも，より効果的な自己表現を見つけた時は，一瞬のうちにその効果を判断して，和歌でなく漢詩に切りかえる自由柔軟な姿勢である。

こういう才女の条件を生かすためには，応用可能な領域をできるだけ広く持っておく方がよい。先の話に出て来た女御芳子のような最高級クラスの女性には，そこまでの頭の回転の早さは要求されないが，そういう最高級クラスの女性のまわりにいる女性たちは，男性のおもて芸である漢籍の知識まで，時あっては利用しながら対応できる能力が要求される事になるのである。この兵衛の蔵人の答えを村上天皇は「歌などよむは世の常なり。かく折に合ひたる事なむ言ひがたき」とおほめになったという。女性が漢籍の知識を使っても賞讃の対象となりうるという事が，村上天皇の讃辞によって公認されたのである。少し前まで，あの紀貫之すら，仮名で日記を書く時には女性に仮托して，「男もすなる日記といふものを，女もしてみむとてするなり」と書き出さねばならなかった。漢文が書けること，漢籍の知識があることは，当初，女性の教養にそぐわぬものという認識があった。しかし醍醐・朱雀・村上と，三朝の時代の移り変りの中で，漸次こういう変化が生まれたのである。

兵衛の蔵人の話は，枕草子の中に，何のことわりもなく昔の打聞きという形で記されている。おそらくこれも，宮仕えに出てから，清女は，何かの折，定子からでも聞いたのだろう。定子は，兵衛の蔵人の逸話を語ることによって，自分の身辺でも女性たちが，漢籍の知識に基く会話を交わしてさしつかえない事を公認し，それを促進する姿勢を示したわけである。それは清女に，自分の備えている才能をすなおにおもてに出して行ってもかまわないのだという自信を与える事になる。

兵衛の蔵人は天徳4年3月の内裏歌合や，康和3年閏8月15日の内裏前栽合に参加している歌人である。康保3年（966）といえば，清女が誕生した頃であって，清女誕生の頃には既に清女に似た才女が宮廷にあらわれていた。それは，女御芳子などより，もっと自由な自己表現の出来る女性だったわけである。

7　educator の役割

村上天皇と兵衛の蔵人との対応は，天皇と臣下，奉仕される者と奉仕する者という関係を離れて，そこに才能を引き出す機会を作る者と，その機会をとらえて才能を伸す者という，いわば教師と生徒の原型があるように私には感じられる。才能を引き出す(educe)者と引き出される者との関係である。これをもっとはっきり示すのは，次の話である。

同じ村上天皇が，同じく兵衛の蔵人をお供にして，殿上の間におられた時，火櫃から煙が立つのを目にされた帝は，「かれは何ぞと見よ」と，彼女にお命じになる。彼女は見に行き，帰って来て，こう報告する。

わたつ海の沖にこがるるもの見れば　あまの釣してかへるなりけり

“海の沖に漕ぐものをよく見たら，それは漁夫が釣から帰る所でした”—— 歌のおもての意味はこうなる。歌の裏の意味は，「おき」すなわち赤くおこった炭火に，「こがるる」焦がるる（すなわち火に焼けている様である），その正体をよく見たら，「かへる」蛙であったという返事である。この話，「火櫃に煙の立」っていたのは，「蛙の飛び入りて焼くるなりけり」と説明がついている。

ただ，読者はこの話のおかしな所に気がつくはずだ。火櫃は冬の暖房用に用いられる具である。禁秘抄によると，殿上の間の調度として「火櫃二」とあるが，これは「十月ヨリ三月ニ至リ，四月ニ至リ撤ス」とある。四月以降は火櫃は殿上の間にない。蛙の出廻るのは丁度この火櫃のない季節である。とすれば，火櫃に火のおこっている冬期，何かの事情で冬眠から目ざめた蛙が，のこのこと階を這い上り，殿上の間に侵入し，しかもうまく火櫃の火中めがけてダイビングを試みたことになる。が，こういう事態の起る確率はきわめて少ない。

そこで，蛙が自分の意思で火中に飛びこむはずがないとすれば，火中の蛙は人為的に投ぜられたものと判断せざるをえない。おそらく村上天皇は，先の，器に盛った雪に梅の枝を挿そうと庭の梅の木のもとにお立ちになった時，もずか何かが枝に突きさしていた蛙のミイラを，これも何か役立つかもしれぬとお持ち帰りになり，このミイラの蛙をあらかじめ火中に投じて，煙の昇る頃あいをはかって，兵衛の蔵人に，煙の正体の偵察を命ぜられたものと推定される。

この様な推定は，事実か否か確かめようもないが，もしこう考えた場合，村上天皇は，一方では兵衛の蔵人がどんな報告をするかを楽しみにしておられたであろう。他方，村上天皇は，兵衛の蔵人が才能を発揮できる場面を人為的に準備された事にもなる。村上天皇は，宮廷生活の中で，そこに仕える女性たちの才能を引き出すためのeducatorの役割りを果しておられたのである。

当初のeducatorは，こういうふうに男性であった。しかし清少納言の仕えた定子の場合を考えてみよう。そこではeducatorは定子である。村上天皇の時代から，冷泉・円融・花山の各天皇の時代を経て行くうちに，宮廷の宮仕えの生活，即，女性高等教育の場でのeducatorは，男性から女性へと変ったわけである。完全に変りおおせたというのではない。女性のeducatorの進出が目立つようになったということがいいたいのである。

有名な香炉峯の雪の話にしても，定子は，「雪のいと高う降りたる」日に，普通なら雪見としやれていい所であるが，「例ならず御格子参りて」外を見えぬようにしておいてから，「少納言よ，香炉峯の雪，いかならむ」とお尋ねになる。清女の才能をひき出すための場面設定である。加えて，「外の雪景色が見たい」などという散文的ないい方はしないで，「香炉峯の雪，いかならむ」と，正解答を出すためのキーワードを，質問の中に用意してあるのである。

いうまでもなく，清女が御簾を高々とあげる演技でこれに答えたのは，白氏文集にある詩による。

日高ウシテ睡リ足リテ尚ホ起クルニ慵（ものう）シ，小閣衾（ふすま）ヲ重ネテ寒サヲ怕（おそ）レズ，遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欹（そばだて）テ聴キ，香炉峯ノ雪ハ簾ヲ挑（かか）ゲテ看ル（下略）

「挑簾」という「挑」の字は，本来，簾を高々と巻きあげる様な動作を意味しない。大体，白楽天は，日が高くなってもベットの中でごろごろしているのであって，布団を重ねたバリケードの中で暖をむさぼり，遺愛寺の鐘も，“雪の中，あそこまで行く必要はない，こうしていても寺の鐘の音は聞えるじやないか”などと考えているのである。だから，高々と簾を巻きあげて室内の暖気を逃がしてしま

うような無駄は，省エネルギーの観点からいっても，いっさいしない。ベットの上から手をのばして，ブラインドの端をめくり，ちよいと峯の雪景色を眺めると，すぐまたベットへもぐりこむという具合である。それが「撓簾」の意味である。

だから清女は，白氏文集の詩の本当の意味などちっともわかっていないのであって，競争意識の強い紫式部などからは，「さばかりさかしだち，真名書き散らして侍ふ程も，よく見れば，まだいと堪へぬ事多かり」（紫式部日記）と批評される事にもなる。

しかし，学問には，真理追求を厳格にやらねばならぬという専門深化志向と，それをどのように応用展開して行くかという境界領域総合化志向とがある。定子後宮で要求されているのは，教養を社交の場の中でうまく利用して，その場の人をはっとさせる着想の妙である。それは，定子の父道隆などがよく口にする冗談とも通ずるものだ。

中宮から，「香炉峯の雪」というキーワードまで与えられている限り，出題者の意図を顕彰するためにも，清女の大袈裟な身振りは必要不可欠のものだったわけである。これは課題方式による学習成果の発表上，おのずから求められる展開であり，清女は，いつまでも曽つての兵衛の蔵人などと同じ姿勢を取り続けてはならなかったのである。換言すれば，新しい社会的要請に応ずる対応のしかたを生み出さねばならなかったのである。

8　学習成果としての著作

枕草子は定子皇后の薨じた長保2年（1000）以後も書き加えられ，推敲を加えられながら現在の形になって行ったようであるが，その中の一部分は既に長徳2年（996）に完成し，世に流布していた。この事情は，枕草子の跋文に，次のような記事が見える。

伊周が定子に紙を献じた時，定子が「これに何を書かまし」とご下問になり，清少納言が「枕にこそは侍らめ」と答えたところ，“ではお前にあげよう”という事になって，清女はその紙をいただき，これに書いた記事が，枕草子という書名で世に流布したのだという。「枕にこそは」とは，どういう意味なのか，学者の間にも様々な説があるが，今，あまり立ち入らぬことにしておく。

当初，清女は，この内容は「ただ心一つに，おのづから思ふ事を，たはぶれに書きつけ」たものだから，人に見せるつもりはなかったと言っている。だが，ある日，左中将源経房が，まだ伊勢守と呼ばれていた時代——というのだから，長徳元年正月から同三年正月までの間であるが，彼が清女の里を訪問した。清女は部屋の隅にあった座布団を，“どうぞ”と差し出したら，その座布団の上に「この草子載りて出でにけり」という事になった。座布団の上に枕草子がのっているのに気がつかぬというのでは，清女は余程の近眼ででもあった事になる。おそらく，“読んで見てください”と自著をさし出す普通のやり方では満足できない，清少納言の演技であろう。経房はこれを持ち帰って，それ以後，枕草子は「歩きそめたるなめり」という。座布団に座って人前に出た枕草子は，著者の意思とはかかわりなく，世間へ向かって「歩き」始めたわけである。

当初の枕草子には，「歌など」や「木・草・鳥・虫」などについての随想が含まれていたらしい。「鳥は」とか「虫は」とか，「木の花は」とかの書き出しでまとめられた，物づくし類聚段などであ

る。また，「はづかしきなんどもぞ見る人はし給ふ」という枕草子を読んだ人の世評を記している所から見ると，日記的実録的章段の一部も含まれていたであろう。枕草子を読んで「めでたし」と批評するならわかるが，これを「恥かし」と批評する読者がいたという事は，読者が日記的実録的章段を読んだ事を裏づけている。「はづかし」というのは，相手の顔を正視できないという感情であって，おそらく読者は，自分でも記憶にないある日の自分の姿が，枕草子の中に描かれているのを見て，“こんなにまで見つめられ，観察されていたのか”と，てれる。この感情が「はづかし」である。

日記的実録的章段に記されているのは，宮仕えという後宮生活の高等教育の場の中で，どのような教育実践が行われたかの，現場の記録である。物づくしの類聚段すら，定子のまわりで日常語られる会話・思考の，共通理解の水準を整理記述した，一種の指導要領のようなものだったかと考えられもする。それらは枕草子という一書にまとめられ，定子後宮の文化的教養の到達点を示す恰好のリポートになっているのである。

高等教育に関する成果の報告書は，いつでも枕草子のような形で書かれるとは限らない。清女が宮仕えに出る前，既に女性を中心とした文化グループを形成していた大斎院選子の所では，「大斎院前の御集」とよばれる歌集の形で，その成果の報告書がまとめられている。ここでも，大斎院自身は，定子と同じように，すべての活動のかなめの位置に座っていればいいのである。まわりの馬の内侍その他の女房たちが，時々刻々に起る場面を記録し，集成し，報告書にまとめて行く。定子と大斎院選子とに共通する所は，曽つて村上天皇が果していたeducatorの役割りを，女性が受け持つようになっている点である。

9 自由裁量と創造性重視の指導体制

定子が薨じる長保2年に，道長の娘彰子は中宮に，定子は皇后となっている。皇后といい，中宮といい，この両者には身分の違いはない。同年12月，定子が薨じた後，一条天皇の時代の後宮の中心には，左大臣道長をバックにした彰子が君臨することになる。

定子は，先輩格の大斎院選子に相当気を使っていた。斎院へ出す手紙，あるいは斎院から来た手紙への返事を書く時，定子は「心ことに，書きけがし多う」，書き損じを重ねて特別の配慮を払っていた（枕草子，雪山の段）。この定子の配慮は，おのずから仕えている清女たちの気持ちにも反映する。清女が「物語は」の段の冒頭にまず住吉物語をあげているのは，住吉物語が本来大斎院を中心とする文化サークルの中で形を整えた作品である所に起因すると私は考えている。

ところが，彰子となると状況は変って来る。斜陽化した中の関白家の一員として体面を維持して行かねばならなかった定子とは違って，彰子の方は，後に権力者道長がいる。誰に何の気がねをする必要もない。自主的な判断に基いて，万事を自由裁量で進めることができる。批判力を生かしながら創造性を伸してゆける土壌がそこにはある。定子に対しては，いわば優位に立って指導的な立場にあった大斎院が，彰子に対する時，微妙な変貌をとげる。

ある春の日，大斎院から彰子の所へ，“春の日のつれづれをまぎらわすために，何か面白い物語はないか”という依頼が来る。彰子は女房たちを召集して，どんな物語を斎院へさしあげるか協議する。

たかが物語１つを選ぶのにそうまでしなくてもと考えるのは，実状にうとい現代人の受取り方であって，今日でも他人へ贈るおくりものの選定に，相手の趣味や各種の条件を考え合わせて，ああでもない，こうでもないと気を配る。滅多なものを送れば，相手から趣味の悪さを笑われることになりかねないからだ。

紫式部はここで，“古い物語では，陳腐。ここは一つ新しく作ってさしあげてはいかがか”と提案し，彰子はこの案に賛成する。“ではお前がお作り”と，紫式部に全権を托した。こうして源氏物語が作られたという，物語成立の伝説である（古本説話集）。

伝説とはいうものの，私にはこれはあり得る事実だという気がする。まず紫式部がその場に居合わせたのだから，これは彼女が宮仕えに出た寛弘２年（1005）末以後，季節は春だから，寛弘３年か４年の事であろう。寛弘５年になると，もう源氏物語は宮中の話題になって，一条天皇も道長も，この本について相当の知識を持っているのだから（紫式部日記）。

宮仕えに出たばかりの頃，紫式部はなかなか新しい環境になじめず，「恥かしいみじと思」って里へ逃げ帰り，「はかなき物語につけて」「そぞろごとにつれづれをば慰めつつ」日を送っていたという（日記）。夫宣孝を失って，幼い賢子を抱えた紫式部であるが，里へ帰って賢子の世話をするよりも，「はかなき物語」に没頭するというのである。他人の書いた物語でもかまわぬわけだが，どうもこれは当初の雇用目的を変更して，“出仕は気の向いた時だけでよろしい，自宅研修中は物語創作に専念せよ”という具合いになっていたのではないかと考えられる。寛弘３年中には，夫と死別以来，書き次いでいた源氏物語もある程度まとまって，最終整理段階にあったであろう。

彰子のご下問に，新作物語を斎院に献ずる事を提案するからには，物語新作の作業も併せて命ぜられる事になる可能性も計算の中に含まれていなくてはなるまい。自信はあっても，新作完成に１年も２年も日時を費すわけにはいかない。紫式部は，ほぼ完成した原稿が里の書斎に積んである事を頭において答えたはずだ。とすれば，大斎院からの物語注文は寛弘４年春だったというのが可能性としては大きい。

彰子はまだその新作物語が，どのような出来ばえかは知らない。しかし，紫式部の自由研究を許し，紫式部がそれをいよいよ発表したいというなら，彼女の才能を全面的に信頼して，彰子は決断する。創造性を伸すための自由裁量である。ディレクターとして役割りと責任を果す彰子の姿をそこに見る。

ところで，寛弘４年といえば，大斎院選子は40歳を越えている。40歳を越えて，なお物語に熱中し，何か面白い物語はないかと彰子の所へ打診して来るというのは，本心から物語が読みたかったというよりは，儀礼的な申し出であったろう。ちょうどこのころ，彰子は20歳ばかりで，それは大斎院が住吉物語などを与えられたのと同じ年令に当る。大斎院の所で住吉物語は改訂されたりして，それは大斎院の所の文化的営為を活発にするエネルギー源となった。曽つて物語を与えられる側であった大斎院は，今，彰子の所へ物語を求める事によって，彰子の後宮に一つの活力を与えようとしたのである。物語注文は彰子の後宮をにぎわす事になる。そう考えての儀礼的な要請であったと私は解したい。

村上天皇の例，定子の例は，後宮社会を女性の高等教育の場として機能させる際，小単元を基礎にした課題方式を採った。大斎院は，その課題をより拡大し，新しい物語創作に向けて活動が開始できるような条件を作り，課題の細部については，当事者たちの自由裁量にまかせるという，新しい方式

を編み出したわけである。そして，彰子の側はこれを受けて新しい課題に充分応えうる実績を示した。またそれを可能にする人材をそろえていたわけでもある。文化の成熟度がそれを可能にしたのだと申してもよかろう。

10 おわりに ―― 一つの壁

源氏物語は，物語の形式の中に文化のあらゆる要素を採り入れた。歴史学も政治学も，人間関係論・女性論・書道論・歌道論・物語論・教育論等々。後代，一流歌人等も源氏物語を必読の参考書とした。女性の手によって書かれた報告書は後の高等教育・一般教養の必須テキストになったわけである。

しかし，本来，高等教育課程の到達水準を示すためのリポート，報告書であった著作が，間もなく高等教育のためのテキストに使われるようになると，その規範性が学習者の自由を拘束する方向で働くようになる。宮廷の宮仕えが，そこに身を置く女性たちの高等教育の場として活発に機能しにくくなる。新しい創造へ向かうよりも，源氏物語を踏まえて，その活用をはかる活動だけが主流を占める結果を生むのである。平安時代後期の物語は，源氏物語の亜流になったし，宮廷の行事が源氏物語を摸した趣向で行われたりするようにもなる。曽つて，白氏文集など，今まで男性の世界のものだった中国の典籍などを，女性の世界へ持ちこむ事によって，新しい文化を創造して行く道を見出した学習者たちは，新しい素材に挑戦する冒険をやめて，既に完成されている源氏物語の世界の中で，そつなく動き廻るだけで終るようになって行く。指導要領が出来るとそこから抜け出す実験がやりにくいのと同じ事態であろうか。

しかし，こういう形で指導要領に準ずるテキストが出来ると，これに応じた新しい現象も生まれる。宮廷社会という高等機関に入らなくても，テキストを通して高等教育を自習する事が可能になる。それは平安時代なりの大学開放，高等教育の開放現象であり，大衆化された高等教育の問題と似た要素をそこに見る事もできよう。

男性のための大学があり，次にこれとは設置形態を異にする宮廷社会サロンが女性の高等教育のための機能を果すようになる。その女性高等教育の機能の拡充の中で，そこから生み出された文化的成果は男性の教養へも影響を及ぼすようになる。しかし，そこで確立された成果は，一方ではその機能が本来持つていた自由な創造性を拘束するように働き，他方では学習するのに教育棟も教師も必要とせず，意思さえあれば誰でも自由に学習できる教育の形態をも生み出した ―― こういうまとめ方をすると，それは1000年昔の事ではなく，現代の流動する高等教育の問題の縮図のようにも思われて来る。

後半，多少論旨を端折った所があるが，以上で題目にかかげた問題の素描を終ることとしたい。

Higher Education for Women in Japan in the Tenth and Eleventh Centuries

Keiji Inaga*

This paper examines the structure of Japanese higher education from the late tenth to the early eleventh centuries in the Heian era, focusing on those women who served in the Imperial Court. It also attempts to identify proto-typical problems with which modern Japanese higher education must deal.

The outline of higher education in the "prosperous era of colleges (Daigaku)" for men (the words in *Genji Monogatari*) is described in Chapter one through three. The examination system of higher education and the social status, education, of professors are also discussed.

Chapter four through six explain that those women who were not college-educated acquired the skills necessary to entertain college educated men, often defeated them in battles of wit and value exchanges. "What was the general purpose of higher education for women?" "In what kind of human context could they get those culture or skills?" These problems are considered through the dialogue between Emperor Murakami and women bureaucrats. It is concluded that the Emperor took a position supporting the education of women in the Court.

Various aspects of the transition to include women in higher education are discussed in Chapter seven through ten. (1) The control of programs for educating women was shifted from men to women. *Seisho-nagon* was typical of the intelligent women to emerge during this process. (2) Reports were written about the outcomes and achievements of women in the Court through the institution of higher education for women. (3) *Genji Monogatari* was written under the direction of an Empress.

* Director, RIHE. Professor, Faculty of Letters, Hiroshima University